

する。

患者は57歳の女性で、右側下唇部のしびれ感・右側下顎臼歯部の自発痛を主訴に本学口腔外科受診し、生検・CTにて右側側頭下窩を中心とした平滑筋肉腫の診断で、化学療法5クール・外照射66Gyを施工した。

その約3年後に右側下顎骨にCTにて骨形成を伴う軟組織病変を認めため、生検後下顎骨切除術を施行したところ骨肉腫の病理組織診断が得られた。

以上の経過を画像的に検討し、両腫瘍間の関係を考察したところ、初診時にすでに腫瘍は側頭下窩から下顎骨に及んでおり、1つの腫瘍内に平滑筋肉腫・骨肉腫といった複数の組織像を有していたのではないかと考えた。

5) 肺癌 CT 検診12ヶ月の報告

新妻 伸二・真保 禎二
三上 桂子・佐藤 和美 (新潟県労働衛生
医学協会)
山田 一美
古泉 直也 (新潟大学放射線科)

【目的】肺癌検診にCTが利用され始めているが、当施設でも95年6月より肺癌CT検診を実施している。CT検診は胸部検診の精密検査として行う場合と、本人の希望による肺ドックの2方式である。95年度の胸部撮影件数は検診・ドック合計して43万件で、CTは要精検2,700件中309件に精検を行い25例(7.2%)の高率で肺癌が発見された。一方肺ドックでは2,775例中13例(200人に1人)の肺癌とその他の部位の癌3例が発見された。平面写真で不明が7例、喫煙係数400以下が6例、全腺癌で女性が3例であった。

【結語】現在胃癌検診による癌発見率は500人に1人といわれているが、肺ドックの肺癌発見率は200人に1人であった。平面写真不明が半数と肺ドックCTの効果は絶大であった。

6) 高分解能コンピューター断層撮影での淡い陰影を呈する肺腺癌の鑑別

—小型スリガラス濃度陰影の病理—

古泉 直也・斎藤 友雄
酒井 邦夫・木原 好則
松月 由子・森田 哲郎 (新潟大学放射線科)
薄田 浩幸・内藤 眞 (同 第二病理)
大和 靖 (同 第二外科)
江村 巖 (同 附属病院病理部)

肺腺癌の鑑別のため、20mm以下の切除された肺野

限局性スリガラス領域32病変について高分解能CT画像と切除病理組織標本を対比した。肺腺癌(低分化)1病変、細気管支肺胞上皮癌22病変、細気管支肺胞腺腫4病変、炎症性変化5病変であった。組織標本上で消失せずCT上5mm以上であった28病変中27病変が肺癌であり、5mm以上の淡く消失しない病変は、高率に肺癌であり、積極的に病理組織学的検索をすべきであると考えられた。

7) 肝細胞癌に対する経皮的エタノール注入療法後のMRI所見

加村 毅・木村 元政
関 裕史・尾崎 利郎
内山 早苗・中山マウロ (新潟大学放射線科)
酒井 邦夫
市田 隆文 (同 第三内科)

肝細胞癌に対する経皮的エタノール注入療法(PEIT)後のMRI所見を検討した。PEIT後のMRIが撮像された19例27病変(病変延べ撮像回数29回・PEIT終了からMRI撮像までの期間1~837日)を対象とした。PEIT後の腫瘍近傍のdynamic study早期相での濃染はPEIT終了後1カ月以内で10/14回、1カ月以後は1/15回にみられ、PEIT後早期の所見であった。PEIT後1カ月以内に撮像され経過観察しえた11病変中、再発は7病変、再発なしは4病変であった。再発の予測はT1、T2強調像では困難だったが、dynamic studyでは再発例中2病変にPEIT後1カ月以内の撮像で早期濃染がみられた。1カ月以降の撮像7例中6例が再発例で、dynamic studyでは6例全例で可能だった。

8) 原発性胆汁性肝硬変に認められた肝内腫瘍性病変

見田 有作(新潟大学第三内科)

【症例】59歳、女性。【主訴】肝腫瘍精査。【現病歴】1985年に原発性胆汁性肝硬変(Scheuer I期)と診断され、1989年よりUDCA療法を受けていた。1995年8月の腹部USにて肝左葉に16×12mm大の低エコー腫瘤を指摘され、検査目的に11月7日当科入院した。【検査所見】GOT 38 IU/l, GPT 37 IU/l, AIP 163 IU/l, TB 0.4 mg/dl, AFP 4 ng/ml, PIVKAIⅡ<0.06 AU/ml, CEA 2.0 ng/ml, CA 19-9<2 U/ml, HBs抗原(-), HCV抗体(-)。【画像所見】CTではplainでlow density areaを認め、dynamic studyの早期でiso、後期でlow

density 所見を呈した。MRI では腫瘍は指摘できなかった。DSA では腫瘍濃染像を認めず、CTAP で明瞭な perfusion defect を認めた。【病理所見】診断確定のため超音波誘導下腫瘍生検を施行したところ、明らかな悪性所見は得られず一部に granuloma の集簇像が見られた。非腫瘍部は Scheuer I 期の所見であった。【まとめ】本症例は原発性胆汁性肝硬変の経過中に肝腫瘍病変を認め、画像診断にて高分化型肝細胞癌を否定できず、生検にて肉芽腫の集簇がみられた貴重な症例と考え報告した。

9) 術後出血の長期予後

三浦 努・関 裕史
加藤 毅・木村 元政
酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)

【目的】術後出血に対する TAE を施行した症例を対象にし、原疾患その他の背景因子と、再出血の有無、生存期間等の予後について検討した。

【方法】1987年から1993年までの7年間に術後出血によって TAE を施行した13症例について検討した。

【結果】13症例のうち1例は、膵炎による偽嚢胞の術後出血した症例に対しての TAE 症例であり、10年間生存し再出血等なく経過している。1例は早期癌の術後だが、感染のため DIC+subshock の状態で、他は全例進行癌に対する拡大手術後の出血であった。長期生存例以外の12症例の平均生存期間は約128日で、いずれも癌死や他病死であった。再出血した症例は2例あり、いずれも DIC+subshock の状態で、先行する緊急の止血手術があった。1例は再度 TAE して止血したが、DIC のため6日後死亡している。1例は TAE 後すぐに止血手術を行ったが止血しきれず、3日後死亡している。術後、TAE 前に感染または DIC のあった症例は4例あり、その平均生存期間は18日であり、短くなっている。

【結論】感染や DIC の存在がなければ術後出血に対する TAE の長期予後は原疾患に依存するものと考えられた。

10) ヘルカリ CT による乳癌の乳管内進展巣の診断

植松 孝悦・酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)
椎名 眞・小林 晋一 (新潟県立がんセン)
清水 克英・笹本 龍太 (ター放射線科)
佐野 宗明・牧野 春彦 (同 外科)
本間 慶一 (同 病理)

【目的】ヘリカル CT (HCT) を用いて乳房温存療法で問題となる乳管内進展 (DS) と多発の検出能について検討した。DS については乳房撮影 (MMG) とも比較した。【方法】造影剤 90 ml を 1.5 ml/秒で投与した場合の至適スキャン開始時間を乳癌12症例で検討した。その結果をもとに造影剤注入開始後70秒に X線ビーム幅 3 mm, pitch=1 で腫瘍と乳頭を含める範囲を HCT にて撮影した。対象は95年6月から12月までに病理学的確定診断のついた浸潤性乳管癌84例である。

【結果】DS and/or 多発の sensitivity 76.3%, specificity 89.1%, accuracy 83.3%, DS は MMG の false negative 症例の40% を HCT により診断された。

【結論】1. HCT による DS と多発の診断は可能であり有用である。2. 三次元画像は術者の病変把握と患者への説明に有用と思われる。

II. 特別講演

閉塞性動脈疾患に対する経皮的血管形成術の最近の進歩

弘前大学医学部放射線医学教室助教授

淀野 啓先生

第37回新潟画像医学研究会

日 時 平成9年6月14日 (土)

午後2時～6時

会 場 長岡商工会議所

I. 一般演題

1) 螺旋走査型 CT の有用性

村上 直人・高橋 祥 (燕労災病院)
佐野 克弘 (脳神経外科)

螺旋走査型 CT の脳神経外科における有用性を検討し、報告した。